

見えないけれど、見えるもの

〈こころ〉はだれにも見えない
けれど〈こころづかい〉は見える

〈思い〉は見えない
けれど〈思いやり〉はだれにでも見える

このフレーズ、耳にした方は多いと思います。これは、テレビコマーシャルで流されているキャッチコピーですが、元は、宮澤章二さんの詩「行為の意味」の一部を切り取ったものです。

宮澤章二さんは、30年間にわたって埼玉県の中학생のために一遍の詩を送り続け、2005年3月に亡くなっておられます。

彼が創作した詩は、息子である鏡一氏が「青春前期のきみたちに」送る3冊の詩集として編集し、世に出しております。

私が手にしている詩集は、その内の「行為の意味」という表題の詩集で、冒頭で紹介した詩の題でもあります。

自分にも、若い頃、例えば、目の不自由な方に手を差し延べようという気持ち、お年寄りに席を譲ろうという気持ちはあるのに、周りの目を意識して行動できなかった経験があります。

何故なのだろう、と考えると、恐らくは、中学生くらいの年代というのは「格好良く振る舞うことに対して、恥ずかしい」という気持ちや「格好良い」ことは「格好悪い」という、ナイーブで複雑な気持ちがあるのかなと思います。

地下鉄の中などで若者達の様子を見ていると、気持ちはあるけれど、いざ行為に表そうとすると一瞬の逡巡がある、心の中では、手をさしのべろ、席を譲れという自分と、周りの目を気にして立つなという自分との葛藤が目に見えるようです。

子どもだけではなく、誰にとっても、思いを行為に移すには勇気が要るということです。勿論、大きな勇気は必要ありませんが、でも、その小さな勇気は日々の暮らしの中で、いつも試されていますから、多感な中学生の頃というのは、気持ちが屈折していくことになるのではと感じられます。

「あなたの〈こころ〉はどんな形ですか」とひとに聞かれても答えようがない。自分にも他人にも〈こころ〉は見えませんかから。

でも、作詩家の宮澤章二さんは、「ほんとうに見えないのであろうか」と問いかけます。

その答えが、冒頭の詩です。

〈こころ〉は見えないけれど〈こころづかい〉は見える。〈思い〉は見えないけれど〈思いやり〉は見える。何故かといえば、いずれも積極的な行為だから、と答えています。形に表せば、そのこころや思いは皆に伝わるのだから、一歩踏み出す勇気を出せと中学生達に呼びかけています。目の見えないひとがいたら手をさしのべなさいとも、お年寄りがいたら席を譲りなさいともいわずに。

詩人の言葉には、力がありますね。 （塾頭 吉田 洋一）